

P-413 肺癌の発生肺葉別の合理的な縦隔郭清

静岡県立総合病院 呼吸器外科

太田 伸一郎, 稲葉 浩久, 吉田 浩幸, 大石 久

【目的】縦隔リンパ節への転移様式と切除成績を考慮した、発生肺葉別の合理的な縦隔郭清法を探る。【対象】平成元年1月から12年12月までに当院でND2a以上の縦隔郭清を行ったpN2-N3非小細胞肺癌105例。【方法】発生肺葉別に縦隔リンパ節への転移経路を検討し、転移様式別に切除成績を比較。【結果】右上葉38例, 右中下葉28例, 左上葉21例, 左下葉18例。右上葉: 上縦隔への直接転移を42%に認めた。下縦隔への直接転移は稀。skip転移例の5生率は62%と良好。一方, 肺門リンパ節転移を伴う縦隔転移例の5生率は12%と不良。右中下葉: 78%が#7に転移。上縦隔に転移の無い症例の5生率73%に対し, 上縦隔転移例では8%。上縦隔リンパ節へは, #7を介した転移が11例(65%), 肺門リンパ節からの転移が5例(30%), 直接転移が1例であった。左下葉: #7までの転移で5生率は25%。#5, 6や上縦隔転移例では5生例無し。左右上葉発生で#7転移の5例は, いずれも進行例。【結論】縦隔リンパ節への転移様式と切除成績から, 右上葉では下縦隔, 右中下葉では上縦隔, 左上葉では下縦隔, 左下葉では上縦隔, #5, 6郭清を省略し, 郭清リンパ節に転移を認めた場合にのみ郭清範囲を拡げるのが合理的。

P-415 左肺癌に対する胸骨正中経路の肺切除 + ND3a郭清の手術成績

神奈川県立循環器呼吸器病センター 呼吸器外科

小川 伸郎, 荒井 宏雅, 菅沼 伸康

【目的】左肺癌に対して行った胸骨正中経路の肺切除及びND3a郭清の予後, 合併症等を検討した。【対象・方法】1995年6月から2002年12月の7年半に行った上記手術131例中, 小細胞癌, 非完全切除を除く117例を対象とした。リンパ節転移の評価はHE診断で行ったが, サイトケラチンの免疫染色も検討した。【結果】病期別5年生存率は1a期: 90%, 1b期: 74%, 2a期: 5生出ず, 2b期: 74%, 3a期: 70%, 3b期: 50%であった。pN別5年生存率はn0: 85%, n1: 52%, n2: 77%, n3: 5生出ず, であった。気管周囲リンパ節にHE上の転移または免疫染色上の癌細胞複数増生所見が確認された症例のうち, 5年以上無再発生存は4例認められた。合併症は左反回神経麻痺12例10% (9例は消失), 乳び胸5例4% (再手術1例), 手術関連死亡2例2% (脳梗塞, 膿胸) などであった。【考察】左肺癌に対するND3aは, ND2では残る気管周囲リンパ節に転移を有しかつ遠隔転移のない少数の患者を救える可能性があるが, そのために多くの患者に合併症を強いる術式であってはならない。今回の検討でも4例はND3aの恩恵に与ったと考えられたが, 重篤ではないが合併症はさらに少なくする努力が必要と思われた。

P-414 体外循環を使用した呼吸器外科手術

¹浜松医科大学 第一外科, ²藤枝市立総合病院 心臓呼吸器外科

高橋 毅¹, 鈴木 一也¹, 霜多 広¹, 朝井 克之¹, 浅野 寿利¹, 数井 暉久¹, 関谷 洋², 春藤 恭昌²

【はじめに】近年, 人工心肺装置の安全性の向上に伴い, 呼吸器外科領域でもその有用性が報告されている。当科で体外循環を使用した呼吸器外科症例について検討した。【対象】2003年1月までに術中に体外循環を用いた呼吸器外科症例は17例であった。心大血管病変との同時手術が6例, 悪性疾患に対する拡大手術が9例 (大動脈弓部合併切除2例, 下行大動脈合併切除1例, 肺動脈合併切除2例, 下行大動脈及び左房合併切除2例, 肺動脈及び左房合併切除2例), 術中の出血に対して緊急に体外循環を用いた症例が2例であった。【結果】周術期に体外循環に直接関連した合併症は認められなかった。拡大手術を行った悪性疾患症例では5例が術後1~15カ月で死亡し, 非根治となった1例が担癌生存中だが, 肺動脈及び左房合併切除1例が術後5年生存し, 下行大動脈合併切除1例, 大動脈弓部合併切除1例がそれぞれ術後36, 14カ月無再発生存中である。【まとめ】体外循環は呼吸器外科領域においても安全に使用することができた。悪性疾患に対する拡大手術の適応には慎重を要するが, 長期生存が期待できる症例もあり, その利用価値は大きいと考えられた。

P-416 肺癌と気管支内MALT lymphomaの並存した1例

¹千葉大学 大学院医学研究院 胸部外科学, ²千葉大学 大学院医学研究院 基礎病理学

尾辻 瑞人¹, 芳野 充¹, 穴山 貴嗣¹, 本橋 新一郎¹, 安福 和弘¹, 伊豫田 明¹, 吉田 成利¹, 関根 康雄¹, 渋谷 潔¹, 飯笹 俊彦¹, 斎藤 幸雄¹, 廣島 健三², 藤澤 武彦¹

肺原発のリンパ腫は比較的まれな疾患であり, 肺原発悪性腫瘍の0.5%といわれ, さらに気管支内腔所見を示す症例は少ない。今回, 肺癌の精査を契機に発見されたMALT lymphomaの1切除例を経験した。症例は63歳男性。2002年7月検診にて胸部レントゲン写真上の異常陰影を指摘され, 当科紹介となる。この右上葉の辺縁不整・境界不明瞭な陰影に対し気管支鏡検査を施行したところ, 上幹入口部と中幹管にそれぞれ隆起性病変を認めた。肺野末梢の陰影はTBACにて腺癌の診断となり, 気管支内腔の病変は生検の結果, CD79aに染色されるリンパ腫と診断された。またGaシンチ, 消化管内視鏡などより, 遠隔転移を認めなかった。術前リンパ腫の広がり把握することが難しいと考え, まず, 右上葉切除術ならびに気管支楔状切除術を先行し, その後残存するリンパ腫に対し化学療法を施行した。原発性肺癌とリンパ腫が併存する症例は比較的稀で, 文献学的考察を加えて報告する。